旭丘小だより

練馬区立旭丘小学校
学校だより　１２月号
平成 28 年 12 月 1 日発行
発行責任者：野田　豊

共　生

校　長　　野　田　　豊

近年、障害者スポーツが少しずつですがメディアで紹介されることが増えていることや先のリオパラリンピックでのアスリートの活躍がテレビ等で放映されたことにより、障害や障害者スポーツへの関心が高まりつつあります。

しかし、実際には、障害者アスリートとじかにふれあって話を聞いたり、一緒に運動したりする機会はほとんどないのが現実です。そこで、本校では、去る 11 月 14 日、車椅子バスケットボール日本代表の土子大輔選手を講師にお招きして、「パラスポーツ体験授業」を実施しました。

土子さんは、２６歳の時に事故で右足を失い、一時は強い絶望感に苦しんだそうですが、車椅子バスケットボールと出会い、人生の夢や生きる希望を見いだしたそうです。以来、弛まぬ努力とチームメートや家族の支えによってめきめきと頭角を現し、一年後には国内で数々の賞を獲得するまでになり、日本代表選手としてリオオリンピックの出場も果たしました。今回の体験教室で土子さんが子供たちに伝えてくれたメッセージを紹介します。

「障害者になって思うことは、自分は決してかわいそうな人ではありません。仲間や家族など自分のことを支え、応援してくれる人がいるので幸せです。」

「感謝する気持ちをもち続けてください。その気持ちを言葉に表すようにしてください。」

「悲しんでいる人、困っている人、悩んでいる人の側にいてあげられる人、励ましてあげられる人が本当に強い人です。」

片足を失うという大きな試練を乗り越えただけでなく、自身が障害者であることに対して微塵も負い目をもたず、人としてのプライドと心の豊かさを感じさせる気高さに心を打たれました。土子さんとのふれあいを通して、子供たちの心の中にもきっと大切な何かが残ったことと信じます。

★

これまで学校だより等でお伝えしてきましたが、本校では、特別支援学級設置校として培ってきた知見と経験という強みを生かし、通常学級に在籍する児童や個別的な支援を必要とする児童、知的障害学級の児童、情緒障害学級の児童、難聴学級の児童等、障害の有無にかかわらず全ての児童が自分の個性や能力を最大限に伸ばしていけるよう多様な学びの場の環境整備と指導の充実に努めています。そして、その教育効果を最大限に発揮するためには、学校と家庭・地域社会が一体となって、障害に対する偏見や差別感情の払拭に努め、子供たちに正しい理解と豊かな共感の心をはぐくむことが何より大切であると考えています。

12 月 4 日から 10 日の期間は、人権週間です。あらためて自分も他の人も同じくかけがえのない大切な一人であることに思いをいたし、障害がある人もない人もともに尊重され、力を合わせて生きてゆく共生社会の実現を目指していきたいと考える今日この頃です。